

年報

—平成8年度—

1997

大磯町郷土資料館

— 目 次 —

[事業報告]

庶務 2

- 組織および職員
- 運営委員会
- 予算
- 維持管理
- 入館者

学芸 4

- 特別展
- 企画展
- 学級・講座
- 刊行物
- 調査・研究
- 博物館実習
- 博物館資料の収集と利用

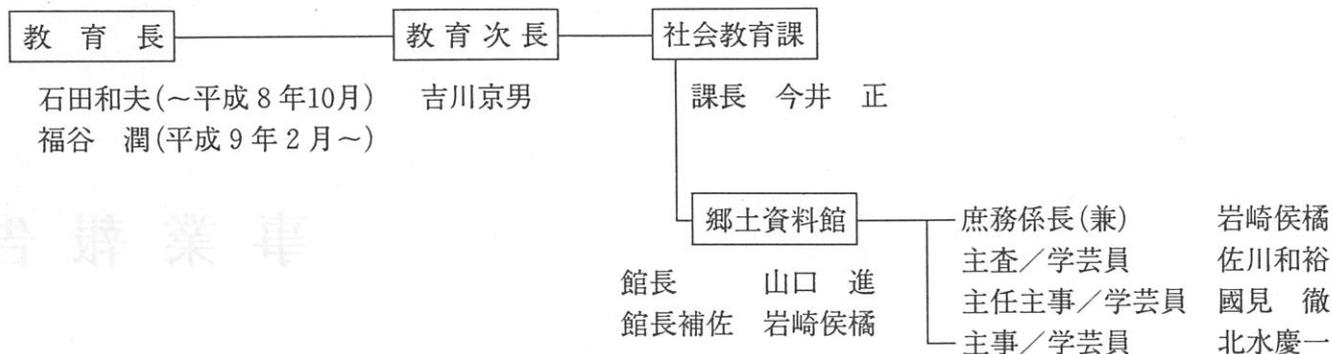
[研究報告]

大磯、平塚のムギブチ唄・唐臼挽唄
林 英 一 14

二宮町山西の民俗（1）
佐川和裕 18

庶務

■組織および職員



■運営委員会

〈委員の構成〉

- ・長岡泰次郎 区長会連絡協議会
- ・稲葉和也 文化財専門委員
- ・福井靖史 学校長
- ・広瀬利郎 社会教育委員
- ・石田和夫 学識経験者
- ・星野善三 社会教育委員 (～平成8年5月)
- ・飯田善雄 学識経験者 (～平成9年1月)

〈委員会の開催〉

- ・平成8年5月10日 平成7年度事業報告、平成8年度事業について
- ・平成8年10月22日 平成8年度事業の進捗状況、秋季特別展の見学について
- ・平成9年2月21日 平成8年度事業の進捗状況、平成9年度事業計画について

■予算

〈当初予算の推移〉

単位：円

年 度	平成4年度	平成5年度	平成6年度	平成7年度	平成8年度
金 額	82,874,000	84,403,000	76,955,000	77,930,000	63,697,000

〈平成8年度決算〉

単位：円

事 業	運営事務	維持管理	学芸活動	特別展	企画展	教育普及	計
金 額	8,635,413	14,893,441	3,188,855	2,112,360	747,091	522,248	30,099,408

職員給与 (31,734,284)
 委員等報酬 (66,800)
 公用車購入 (1,686,439)
 歳出合計 (63,586,931)

■維持管理

〈委託業務〉

- ・総合清掃委託／(株)フジワールド
- ・敷地管理委託／(財)神奈川県公園協会
- ・警備委託／(株)全日警
- ・自家用電気工作物保守点検委託／小島電気管理事務所
- ・消防用設備保守点検委託／相日防災(株)
- ・自動ドア保守点検委託／(株)神奈川ナブコ
- ・昇降機保守点検委託／ダイコー(株)横浜営業所
- ・空調設備保守点検委託／高砂熱学工業(株)横浜営業所
- ・浄化槽保守点検委託／湘南興業(有)

〈施設の修繕〉

- ・給水管振動・身障者トイレ給水調整工事／高砂熱学工業(株)横浜営業所
- ・モニターテレビ修理／湘南家電
- ・補修工作室空調機調整工事／高砂熱学工業(株)横浜営業所
- ・テーブルリフト点検修理／ノムラテクノ(株)

■入館者

〈入館者の推移〉

単位：人、日

	平成4年度	平成5年度	平成6年度	平成7年度	平成8年度	累計(昭和63年～)
入館者数	40,994	37,882	37,565	35,014	31,218	327,777
1日平均／開館日数	140／292	131／289	130／289	121／290	111／281	134／2,429

〈月別入館者数〉

単位：人

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
入館者数	3644	3004	2404	1937	1771	1619	4418	4782	1284	1600	2045	2710	31,218
1日平均	158	125	96	81	68	74	177	199	61	76	92	135	111

〈見学・視察〉

単位：団体

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
件数	1	2	2	2	3	2	5	2	0	1	2	2	24

〈研修室の利用〉

単位：団体

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
件数	19	23	22	20	6	19	23	14	15	14	22	14	211

学 芸

■特別展

「おばあちゃんの針仕事」

期 間 平成8年10月13日(日)～11月17日(日)

開場日数 30日間

会 場 企画展示室・回廊・休憩室

出品点数 約200点

入 場 料 無料

入場者数 6,719人

(趣 旨) 本来、衣服は繰り返して再生されるものだった。新調された外出着も着古されると普段着や仕事着になり、また、何度でも仕立て直しができるという和服の特徴を活かしてオシメや雑巾に至るまで姿を変えた。しかし、やがて使い捨てを美德とする時代を迎え、かつては誰でもできた洗い張りや仕立て直しという技術はもちろん、その言葉さえも失われつつある。こうした状況の中で、昔ながらの精神を引継ぎ、古い着物や余り布を利用して衣服を再生し続けている89歳のおばあさんの針仕事を紹介する。

(内 容) 着るため、使うために再生し、現在でも着用し愛用し続けられている、ハンテン、ソデナシ、チャンチャンコや小物類など約200点を作業風景の写真パネルとともに展示した。

(担 当) 佐川和裕



善語人語

〈善語の善語人〉

「機織りの実演」

期 日 平成8年11月17日(日) 午前11時・午後2時

会 場 研修室

講 師 大谷タケ氏

(趣 旨) 特別展を記念し、小型の機織機を使ってストールなどを織る実演をおこなうとともに、参観者に機織りを体験してもらう。

(内 容) 講師の機織り実演後、希望者を募って機織りを体験してもらった。実演と体験は午前午後それぞれ1回ずつおこない、延べ23名の方々が共同で1本のストールを織り上げた。また、会場には素材となるさまざまな糸見本や、数多くの完成品を合わせて展示し、機織りをおこなうまでの作業工程を理解してもらう一助とした。なお、完成したストールは「手織りのストール展」として、体験者の方々の氏名とともに、平成9年1月7日(火)～3月30日(日)の期間、エントランスホールにて展示をおこなった。

(担 当) 佐川和裕



〈機織り・羊貝〉

■企画展

「アオバトと照ヶ崎」

期 間 平成8年5月26日(日)～6月9日(日)

開場日数 12日間

会 場 企画展示室

出品点数 29点

入 場 料 無料

入場者数 1,498人

(趣 旨) 平成8年2月、大磯町照ヶ崎は、全国的に数少ないアオバトの海水吸飲の飛来地として、神奈川県天然記念物に指定された。その啓蒙を含めて照ヶ崎の自然を再考する。



(内 容) アオバトの剥製、アオバトの海水吸飲行動やホバーリングの様子を写した写真パネルを展示し、アオバトの形態的特徴と特有の行動について解説を加えた。また、照ヶ崎で観察される他の鳥類の剥製も展示した。

(担 当) 北水慶一

「徳利」

期 間 平成9年3月16日(日)～4月27日(日)

開場日数 35日間

会 場 企画展示室

出品点数 約50点

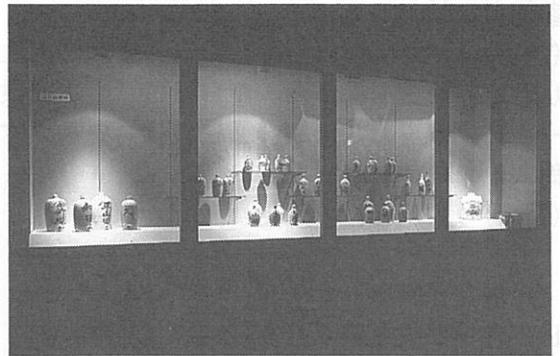
入 場 料 無料

入場者数 4,616人

(趣 旨) 近世から近現代に到るまでの陶磁器のうち、人々の生活と深く結びつき展開してきた酒器「徳利」を視覚的に捉える。

(内 容) 寄贈資料として受入れた近代の資料を中心に、近隣における発掘調査によって得られた近世の資料など50点余りを展示した。

(担 当) 國見 徹



■学級・講座

〈自然観察会〉

「アオバトの生態観察」

日 時 平成8年6月9日(日)

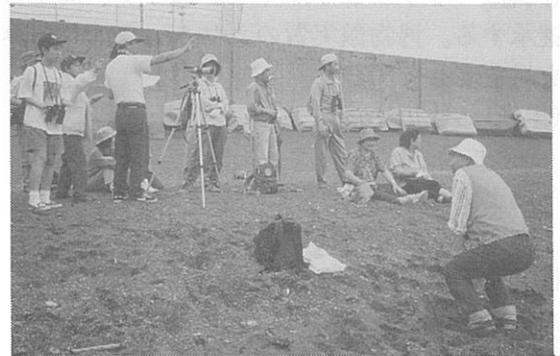
会 場 照ヶ崎海岸

講 師 田端 裕氏 (日本野鳥の会神奈川支部幹事)

参加者 17人

(内容) アオバトの海水吸飲行動の様子を観察。ハシボソミズナギドリなど照ヶ崎で見られる鳥類についても観察することができた。

(担当) 北水慶一



「植物採集と押し葉標本の作成」

日 時 平成8年10月17日(木)・24日(木)・31日(木)

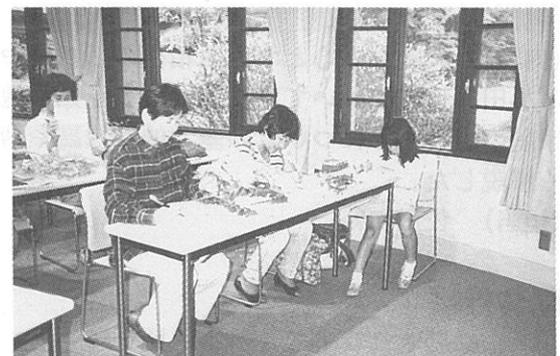
会 場 研修室、城山公園

講 師 北水慶一 (当館学芸員)

参加者 延べ30人

(内容) 植物採集、押し葉標本の作成を通して、植物の分類方法を紹介した。

(担当) 北水慶一



「木の実、落ち葉を使ってクリスマスリースをつくろう」

日 時 平成8年12月14日(土)・15日(日)

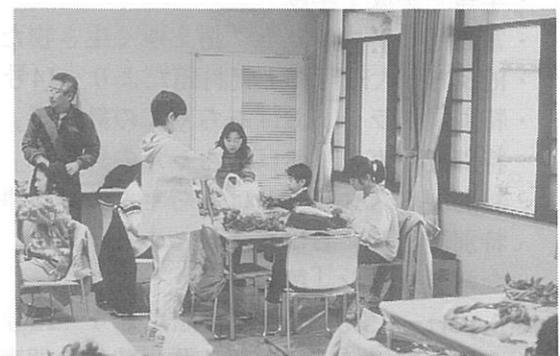
会 場 研修室、城山公園

講 師 中山和也氏 (獣医師)

参加者 延べ46人

(内容) クヌギ、コナラ、シラカシ、スダジイなどの落ち葉や木の実の特徴を学びながらクリスマスリースを作成した。

(担当) 北水慶一



〈子ども歴史教室〉

「The きんじろう」

日 時 平成8年8月7日(水)・8日(木)

会 場 研修室、小田原市内

講 師 木龍克己氏(報徳博物館学芸員)

参加者 延べ29人

(内容) 江戸時代に活躍した二宮金次郎の生涯と、金次郎像(銅像)の秘密を探った。1日目は『金次郎像の不思議』をテーマに講義をおこない、2日目は『史跡めぐり』として金次郎ゆかりの地を巡った。

(担当) 佐川和裕・國見 徹



〈民俗実習講座〉

日 時 平成8年9月6日(金)

会 場 研修室

講 師 土方考策氏

参加者 8人

(内容) ワラズウリづくりを通して、郷土の伝統技術を体験、継承する。博物館実習のカリキュラムに組み入れ、若い世代を対象として実施した。

(担当) 佐川和裕



〈郷土史講座〉

「衝突する伊豆半島と地震」

日 時 平成9年2月8日(土)・15日(土)

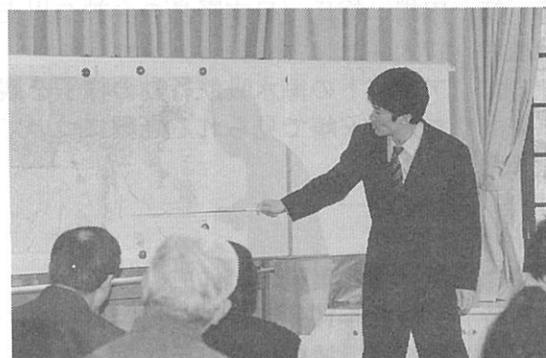
会 場 研修室

講 師 平井昌行氏(寒冷地形談話会会員)

参加者 延べ148人

(内容) 大磯を中心とする西相模の活断層や、懸念されている小田原地震について、また、地震予知や地盤と地震動被害、家屋の点検などについての基本的な知識や情報を分かりやすく解説した。

(担当) 佐川和裕



■刊行物

- ・企画展チラシ「アオバトと照ヶ崎」 B5版 1,000部 (平成8年5月刊)
- ・年報—平成7年度— B5版 28頁 800部 (平成8年8月刊)
- ・常設展リーフレット「消えゆく生き物たち」 B5版 4頁 4,000部 (平成8年9月刊)
- ・Report—大磯町郷土資料館だより—14号 B5版 12頁 2,000部 (平成8年10月刊)
- ・特別展チラシ「おばあちゃんの針仕事」 B5版 4,000部 (平成8年10月刊)
- ・特別展ハガキ「おばあちゃんの針仕事」 A6版 400部 (平成8年10月刊)
- ・特別展ポスター「おばあちゃんの針仕事」 A2版 400部 (平成8年10月刊)
- ・特別展図録「おばあちゃんの針仕事」 A4版 28頁 700部 (平成8年10月刊)
- ・企画展チラシ「徳利」 B5版 4,000部 (平成9年3月刊)
- ・Report—大磯町郷土資料館だより—15号 B5版 12頁 2,000部 (平成9年3月刊)
- ・企画展図録「土器が語る弥生時代の湘南」 B5版 28頁 500部 (平成9年3月刊) *復刻

■調査・研究

〈調査、研究、発表等〉

- ・考古歴史民俗自然資料調査(年間、大磯町内外) 國見 徹、佐川和裕、北水慶一
- ・相模民俗学会総会参加(5月18日、神奈川県立歴史博物館) 佐川和裕
- ・日本考古学協会総会参加(5月26日、早稲田大学) 國見 徹
- ・山十文化財セミナー講義(6月8日、愛川町・山十邸) 佐川和裕
- ・大磯町史民俗部会参加(6月24日、大磯町内) 佐川和裕
- ・親子ふれあい教室指導(7月13日、大磯町内) 北水慶一
- ・国府小学校2年生生活科・3年社会科講義(9月25日・平成9年1月23日、大磯町内) 佐川和裕
- ・横須賀三浦地域観光関連事業調整推進会議講演(10月4日、大磯町内) 國見 徹
- ・日本民俗学会年会参加(10月5日～7日、浜田市・島根県立国際短期大学) 佐川和裕
- ・江戸遺跡研究会講演(平成9年1月22日、江戸東京博物館) 國見 徹

〈執筆〉

佐川和裕

1996.10 「錦絵〈大磯袴龍館之図〉と尾上菊五郎」『Report-大磯町郷土資料館だより-』No14 大磯町郷土資料館

——.10 『おばあちゃんの針仕事』大磯町郷土資料館特別展図録

——.11 「民具整理におけるコンプレッサーの利用」『民具マンスリー』第29巻 8号 神奈川大学日本常民文化研究所

1997. 3 「〈身八つ口のある男物〉と〈半袖のハンテン〉をめぐって」『大磯町史研究』第5号 大磯町

——. 3 「西小磯・東小磯の農耕」『大磯町民俗調査報告書4-大磯の民俗(1)-』大磯町

國見 徹

1997. 2 「已往の形-汽車土瓶終末期の様相」『生産の考古学』同成社

——. 3 「別荘地内出土の汽車土瓶」『大磯町史研究』第5号 大磯町

——. 3 「東海道線の汽車土瓶」『江戸遺跡研究会会報』No60 江戸遺跡研究会

——. 3 「汽車土瓶の年代と性格に就いて」『平成6年度小田原市緊急発掘調査報告書 小田原城三の丸元蔵掘第Ⅲ地点』小田原市教育委員会

——. 3 「第1号溝址出土の近世・近代の遺物」『水尻遺跡』東海大学校地内遺跡調査団

北水慶一

1996.10 「海と山と人と③」『Report-大磯町郷土資料館だより-』No14 大磯町郷土資料館

1997. 3 「海と山と人と④」『Report-大磯町郷土資料館だより-』No15 大磯町郷土資料館

■博物館実習

博物館学芸員資格取得のための実習として7大学8名(駒澤大学2名、専修大学1名、東海大学1名、立正大学1名、東京農業大学1名、帝京大学1名、トキワ松学園横浜美術短期大学1名)の学生を受け入れた。実習期間は下記の日程で延べ12日間とし、内容は地域博物館の実情について学ぶことを基本として総合的な実習をおこなった。また、実習の後半には、常設展示室の一部展示替えをおこなった。

(担当) 國見 徹・佐川和裕・北水慶一

7月31日(水)	ガイダンス、館内見学	9月8日(日)	自然系実習(タッチングプールの開催)
9月3日(火)	講義、町内施設・史跡見学	10日(火)	展示替実習(ガイダンス、資料調査、企画立案)
4日(水)	考古・民俗系実習(資料受入、資料整理)	11日(水)	展示替実習(資料調査、旧展示片付、展示器材作成)
5日(木)	民俗系実習(聞き取り調査)	12日(木)	展示替実習(資料展示、リーフレット作成)
6日(金)	民俗実習講座参加(ワラヅウリづくり)	13日(金)	展示替実習(資料展示、リーフレット作成)
7日(土)	実技実習(梱包、資料取り扱い、16mm映写)	14日(土)	展示替実習(資料展示、記録、片付け)、総括

博物館資料の収集と利用

〈寄贈資料〉

No	受入年月日	資料名	数量	受入先	No	受入年月日	資料名	数量	受入先
0420	H8. 4.14	須恵器片 他	一括	飯田圭太郎、比企伸治 平塚市	1001	H8.10.16	絵はがき 他	一括	木村純子 大磯町大磯
0421	4.19	羽子板 他	一括	加藤広美 大磯町国府本郷	1002	10.29	キフチョウ標本	16	波多野収三 大磯町西小磯
0501	5. 7	ハゴイタ(潜行板)	1	佐藤 勇 大磯町大磯	1003	10.18	地神講の道具 他	一括	高橋要蔵 大磯町西小磯
0601	6. 4	トックリ	2	小巻喜義 大磯町西小磯	1004	10.30	アイロン 他	一括	木村純子 大磯町大磯
0602	6. 5	ハンテン 他	5	久保田スミ 平塚市山下	1101	11. 6	島崎藤村関係資料	4	星 ハルヨ 大磯町東小磯
0603	6. 5	神酒トックリ	2	山口章子 藤沢市大庭	1102	11. 7	ハンテン	1	西山敏夫 二宮町山西
0604	6. 7	掛軸 他	17	山口 進 大磯町国府本郷	1103	11. 7	防衛食容器 他	34	加藤春雄 平塚市壘平
0605	6.18	お歯黒道具 他	一括	木村純子 大磯町大磯	1104	11. 7	絵はがき 他	一括	木村純子 大磯町大磯
0606	6.18	写真	43	大塚博夫 愛川町半原	1105	11.17	吸入器	1	加藤春雄 平塚市壘平
0607	6.19	羽子板	1	加藤春雄 平塚市壘平	1106	11.22	貝標本 他	38	木村純子 大磯町大磯
0610	6.20	レンガ 他	34	住友石炭鉱業(株) 東京都	1201	12. 3	日用下剤	1	板倉佳代子 徳島県板野郡
0611	6.21	和文タイプライター	一式	日吉邦雄 大磯町国府新宿	1203	12.12	机	1	二宮治二 大磯町生沢
0701	7. 4	雛人形 他	一括	加藤春雄 平塚市壘平	1204	12.19	ミツマ式絹越型箱	1	(飯田善雄 大磯町大磯)
0702	7. 9	土器	1	加治 久 大磯町大磯	1205	12.25	五月節供の飾り	一括	加藤てる子 大磯町国府本郷
0703	7.13	アミ(七夕の飾り)	1	三篠智子 平塚市中原	0101	H9. 1. 7	テレビ 他	一括	西海 誠 大磯町大磯
0704	7.24	時刻表	1	辻 儀四郎 寒川町小谷	0201	2. 2	スライド	118	飯田福信 大磯町大磯
0801	8. 1	ハナ(七夕の飾り)	1	鈴木東一 大磯町西小磯	0202	2. 7	スケッチ(東山魁夷)	3	山本和恵 大磯町国府本郷
0802	8.13	絵はがき 他	一括	木村純子 大磯町大磯	0203	2.12	ムシロバタ	1	高橋要蔵 大磯町西小磯
0803	8.31	布見本の布 他	一括	谷久保清彦 大磯町西小磯	0204	2.14	欄間 他	12	木村純子 大磯町大磯
0901	9. 3	掛軸 他	11	加藤春雄 平塚市壘平	0205	2.19	書籍	9	渡辺長吉 大磯町西小磯
0902	9. 4	ポスト 他	28	西海 誠 大磯町大磯	0206	2.19	絵はがき 他	一括	木村純子 大磯町大磯
0207	2.27	スライド	18	飯田福信 大磯町大磯	0302	3.26	ムシロバタ	1	高橋要蔵 大磯町西小磯
0301	3. 4	スケッチ(東山魁夷)	3	山本和恵 大磯町国府本郷	0303	3.26	欄間 他	12	木村純子 大磯町大磯

(敬称略)

<寄託資料>

(件数集計)

No	受託年月日	資料名	数量	受託先	No	受託年月日	資料名	数量	受託先
0401	H8. 4. 1	雛人形	一式	田川順三 横浜市緑区	0413	H8. 4. 1	四季耕作図 他	9	守屋松三郎 大磯町黒岩
0402	4. 1	高札	3	坂井保治 大磯町黒岩	0414	4. 1	古田茂杯 他	5	大沢武久 大磯中学校
0403	4. 1	一本松講中資料	一括	宮沢治吉 大磯町大磯	0415	4. 1	稲荷講資料	一括	中村晴夫 大磯町西小磯
0404	4. 1	菊池重三郎関係資料	一括	菊池なつみ 大磯町大磯	0416	4. 1	掛軸 他	一括	小西直茂 西小磯(東西)区
0405	4. 1	サフラン看板	1	添田佐助 大磯町国府本郷	0411	4. 1	学校手帳 他	2	山川 正 大磯町月京
0406	4. 1	掛軸	1	高木とみ子 大磯町西小磯	0412	4. 1	七夕資料 他	一括	相田 稔 西小磯子ども会
0407	4. 1	小磯囃子道具	一括	渡辺長吉 大磯町西小磯	0417	4. 1	統監帽 他	6	小西直茂 西小磯(東)区
0408	4. 1	書(断片)	一括	加藤文八 平塚市諏訪町	0418	4. 1	獅子頭	2	原田繁雄 裡道区
0409	4. 1	古文書	一括	後藤 勲 大磯町月京	0419	4. 1	古文書	一括	近藤俊雄 大磯町国府本郷
0410	4. 1	稲荷講資料	一括	戸塚 浩 大磯町西小磯	(敬称略、寄託期間：H8.4.1～H10.3.31)				

<移管資料>

No	受入年月日	資料名	数量	受入先	No	受入年月日	資料名	数量	受入先
0503	H8. 5.28	公図	359	大磯町総務部税務課	1202	H8.12.12	きのこ標本	一括	大磯町企画政策室
0504	5.28	看板	1	大磯町立図書館	1206	12.25	絵画(山本丘人画)	1	大磯町総務部総務課
0612	6.14	淡水魚類標本	54	大磯町企画政策室					

<購入資料>

No	購入年月日	資料名	数量	購入先	No	購入年月日	資料名	数量	購入先
1207	H8. 5.31	絵はがき、錦絵	456	すりもの堂書店	1208	H8.12.28	絵葉書帳 温泉一覧表	2	すりもの堂書店

<採集資料>

No	採集年月日	資料名	数量	採集先	No	採集年月日	資料名	数量	採集先
0502	H8. 5. 7	棟札 他	一括	大磯町大磯	0609	H8. 6.19	ワラスグリ	1	大磯町大磯
0608	6.19	木鉢 他	3	大磯町大磯					

<資料の館外貸出>

資料名	点数	利用目的	期間	申請者	資料名	点数	利用目的	期間	申請者
図面 (馬場台遺跡銅印)	1	刊行物掲載	H8. 3.20 ～ 5.20	国立歴史 民俗学博物館	図書(単行本)	1	参考利用	H8.10. 2 ～10.21	個人
図書 (埋蔵文化財報告書)	1	参考利用	4.20 ～ 4.25	個人	古文書 (教育委員会所蔵文)	3	町史編纂	10. 4 ～10. 9	大磯町 企画政策室
写真 (昭和30年代風景)	3	刊行物掲載	4.23 ～ 5.11	東海大学 考古学研究室	古文書 (旧橘家文書他)	7	町史編纂	10.11 ～10.22	大磯町 企画政策室
写真(錦絵)	1	刊行物掲載	5.13 ～ 6.20	(株)石田大成社	写真 (資料館外観・展示)	2	刊行物掲載	11. 6 ～11.20	神奈川県 県民部広報課
ビデオテープ (木遣唄)	18	後継者育成	5.21 ～ 6. 9	個人	写真 (釜口古墳出土銅匙)	1	刊行物掲載	11.12 ～11.20	個人
古文書 (旧豊田家文書)	3	町史編纂	6. 4 ～ 6.23	大磯町 企画政策室	写真 (資料館外観・展示)	2	刊行物掲載	11.18 ～12. 8	県教育庁 生涯学習部
図書(単行本)	1	参考利用	6. 7 ～ 6.26	個人	槍先形尖頭器	1	講演会	11.19 ～11.19	個人
写真(海水浴)	5	刊行物掲載	6.18 ～ 7. 5	(株)新潮社	写真(錦絵・貴重本)	26	講演会	11.26 ～12.17	F D P メモリアル診療
写真・図画 (馬場台遺跡地)	20	刊行物掲載	6.25 ～ 7.12	大磯町 企画政策室	写真 (ふるさと友の会発会)	1	刊行物掲載	12. 7 ～12.31	藤村記念館
ビデオテープ (木遣唄)	1	参考利用	7.21 ～ 7.31	大磯町 教育委員会	写真 (木曾風景写真他)	30	刊行物掲載	12.17 ～(長期)	藤村記念館
写真(島崎藤村)	3	刊行物掲載	8.20 ～ 9.28	大磯町財政課	五月堂	1	展示	12.20 ～(長期)	大磯町 経済観光課
古文書 (西小磯東区有)	一括	参考利用	8.25 ～ 9. 3	大磯町 西小磯東区	古文書 (旧曾根田家文書)	1	町史編纂	12.26 ～ 1.10	大磯町 企画政策室
古文書(諸綴)	2	町史編纂	8.27 ～ 9.26	大磯町 企画政策室	銅印 (馬場台遺跡出土)	1	展示	H9. 1.28 ～ 3.28	藤沢市 教育委員会
古文書 (旧曾根田家文書)	2	町史編纂	9.10 ～ 9.24	大磯町 企画政策室	古文書 (旧小島本陣資料)	4	町史編纂	1.29 ～ 2.10	大磯町 企画政策室
ビデオテープ (鎌倉囃子)	1	教科指導	9.20 ～ 9.21	大磯町立 大磯中学校	古文書 (漁業協同組合文書)	11	町史編纂	2.13 ～ 3.31	大磯町 企画政策室

〈資料の特別利用〉

資料名	点数	利用方法	年月日	申請者	資料名	点数	利用方法	年月日	申請者
仕事着 他	2	撮影・実測	H8. 5. 5	個人	透窓脚付壺 他	10	撮影	H8.10. 6	個人
トックリ	5	撮影	5.28	個人	特別展示風景	—	撮影	10.13	個人
城山荘模型	1	撮影	6. 5	毎日新聞社学芸部	館内風景	—	撮影	11. 5	個人
錦絵 (袴龍館繁栄之図)	1	撮影	7. 7	個人	城山荘模型	1	撮影	11. 8	個人
展示風景・資料	—	撮影	7.14	(株)ビデオ東京	吉田茂胸像 他	8	撮影	11.15	衆議院 憲政記念館
絵はがき・写真 (海水浴)	3	撮影	7.15	(株)アマゾン	錦絵・写真	18	撮影	11.29	(株)西文社
展示風景	—	撮影	8.14	個人	展示風景	—	撮影	11.30	写団さくら会
注口土器 他	11	撮影	8.31	個人	写真(西園寺家別荘)	1	撮影	H9. 1.11	(有)アーバンデザイン
展示風景 他	—	撮影	9. 3	個人(3名)	館内風景 他	—	撮影	2.25	湘南地区 行政センター
郷土資料館 「総合案内」	1	複写	9.25	個人	写真(海水浴)	—	複写	3.18	湘南 なぎさ事務所
郷土資料館 「総合案内」	5	撮影	9.27	(株)アスコム					

〈文献寄贈機関・団体〉

— 県内 —

神奈川県／神奈川県教育委員会、神奈川県自然保全研究会、神奈川県庁、神奈川県博物館協会、神奈川県民俗芸能保存協会、神奈川県立神奈川近代文学館、神奈川県立金沢文庫、神奈川県立丹沢ビクターセンター、神奈川県立公文書館、神奈川県立生命の星・地球博物館、神奈川県立図書館、神奈川県立埋蔵文化財センター、神奈川県立歴史博物館、神奈川県考古学財団、神奈川県文学振興会

横浜市／馬の博物館、相模民俗学会、シルク博物館、玉川文化財研究所、横浜マリタイムミュージアム、横浜市教育委員会、横浜中央図書館、横浜市歴史博物館、横浜市自然観察の森、横浜市勤労福祉財団、グリーンタフ、寺家ふるさと村・四季の家

川崎市／川崎市市民ミュージアム、川崎市立日本民家園、細山郷土資料館

横須賀市／横須賀市教育委員会、横須賀市自然人文博物館

鎌倉市／鎌倉国宝館、鎌倉市教育委員会、鎌倉文学館、鶴岡八幡宮

藤沢市／江ノ島水族館、藤沢市教育委員会、藤沢市文書館、日本大学生物資源科学部資料館

茅ヶ崎市／茅ヶ崎市教育委員会、茅ヶ崎市文化資料館、茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会

相模原市／相模原市立博物館、相模原市立相模川ふれあい科学館

綾瀬市／綾瀬市教育委員会、綾瀬市秘書課市史編集係

海老名市／海老名市教育委員会

大和市／大和市教育委員会

座間市／座間市教育委員会

厚木市／厚木市教育委員会

伊勢原市／伊勢原市教育委員会

秦野市 / 丹沢自然保護協会、秦野市管理部文書課市史編さん係、秦野市桜土手古墳展示館、神奈川県立秦野高校

平塚市 / 東海大平塚校地内遺跡調査団、平塚市博物館、平塚市美術館、平塚市中央図書館

小田原市 / 小田原市教育委員会、小田原市郷土文化館、小田原城天守閣、報徳博物館、西湘リビング新聞社

南足柄市 / 南足柄市郷土資料館

葉山町 / 葉山しおさい博物館

寒川町 / 寒川町企画部町史編さん係、寒川町教育委員会

愛川町 / 愛川町教育委員会

城山町 / 城山町教育委員会

二宮町 / 二宮町教育委員会

山北町 / 山北町教育委員会

箱根町 / 大涌谷自然科学館、箱根町立郷土資料館

真鶴町 / 中川一政美術館

— 県外 —

東京都 / あきる野市教育委員会、板橋区立郷土資料館、江戸東京たてももの園、江戸東京博物館、NHKプロモーション、青梅市郷土博物館、お茶の水女子大学、大塚巧藝社、(株)ぎょうせい、(株)ココロ、(株)小学館、(株)新潮社、国立国会図書館、古賀政男音楽博物館、くにたち郷土文化館、品川区立品川歴史館、世田谷区教育委員会、たばこと塩の博物館、丹青研究所、調布市郷土博物館、通信総合博物館、東海道ネットワークの会、東京家政学院生活文化博物館、豊島区立郷土資料館、府中市郷土の森博物館、福生市教育委員会、福生市郷土資料館、町田市立国際版画美術館、町田市立博物館、外務省外交史料館、儀礼文化学会、文化庁

北海道 / 帯広百年記念館、北海道開拓の村、(財)アイヌ民族博物館

岩手県 / 牛の博物館

新潟県 / 十日町市博物館

群馬県 / 北橋村教育委員会

栃木県 / 栃木県しもつけ風土記の丘資料館、栃木県立埋蔵文化財センター、窯業史博物館

茨城県 / 東町立歴史民俗資料館、土浦市立博物館、土浦市教育委員会、龍ヶ崎市教育委員会、上高津貝塚ふるさと歴史の広場

千葉県 / 我孫子市鳥の博物館、国立歴史民俗博物館、佐原市教育委員会、市立市川考古博物館、市立市川自然博物館、館山市立博物館、千葉県立中央博物館、千葉市立加曾利貝塚博物館、東金市教育委員会、流山市教育委員会、松戸市立博物館、茂原市立美術館・郷土資料館

埼玉県 / 入間市博物館、大井町教育委員会、埼玉県立博物館、埼玉県立歴史資料館、坂戸市教育委員会狭山市立博物館、鶴ヶ島市教育委員会、三芳町教育委員会

山梨県 / 釈迦堂遺跡博物館

長野県 / 茅野市教育委員会、茅野市八ヶ岳総合博物館、藤村記念館

静岡県 / 伊東市教育委員会、静岡県立美術館、静岡市立登呂博物館、沼津市歴史民俗資料館、浜松市博物館、焼津市歴史民俗資料館

愛知県 / 安城市歴史博物館、高浜市やきもの里かわら美術館、豊橋市自然史博物館、豊橋市二川宿本陣資料館

岐阜県 / 多治見文化財保護センター、垂井町教育委員会

滋賀県 / 大津市歴史博物館、草津市教育委員会、滋賀県立琵琶湖博物館

京都府 / 京都橘女子大学、舞鶴市立赤れんが博物館、向日市文化資料館

奈良県 / あやめ池遊園地自然博物館

三重県 / 亀山市歴史博物館、藤原岳自然科学館、真珠博物館

兵庫県 / 伊丹市教育委員会、神戸市立博物館

愛媛県 / 愛媛県立歴史文化博物館

大磯、平塚のムギブチ唄・唐臼挽唄

林 英 一

1. はじめに

昔はいろいろな時間・場で唄が唄われてきた。その時間・場によって唄を類別することができる。たとえば結婚式などの目出度い席で唄われるものは祝唄、仕事中に唄われていたものは仕事唄、あるいは作業唄と呼ばれる。

現在でこそあらゆる仕事に機械が入り込み、ボタン一つの操作だけで、我々の手間は省力化されているが、機械化される以前は当然のことながら、すべてが手作業で、多くの手間と労力をかけて仕事が行われていた。その仕事をやりながら昔はよく唄が唄われていた。唄は手間と労力そのものを軽減させることはないが、気分を楽にし、作業効率をあげるのに役立っていた。

しかし、現在では機械化、および生活の変化のために仕事唄をはじめとする唄が唄われることもなくなり、ほとんど忘れ去られようとしている。唄を唄う時間と場が消失してしまったためである。

大磯町郷土資料館学芸員の佐川和裕氏が大磯町寺坂、平塚市御殿で伝承されていたムギブチ唄、唐臼挽唄を採録し、筆者がそれを採譜する機会を得た。これらの唄を記憶している人も現在ではほとんどいなくなってしまう。そこでこれを記録として残す必要から、若干の考察とともに報告する。

2. ムギブチ唄

ムギブチ唄は麦打唄であり、収穫した大麦を庭に広げ、クルリ棒で打って脱穀する(麦打ち)ときに唄われた唄である。寺坂では隣近所が集まり、屋敷の庭に5人ずつが向き合って、唄いながらクルリ棒で叩いていたという。麦打ちをすると芒で体中がかゆくなり、海に近い地区では終わるとすぐ海に遊びに行ったという。かなり大変な作業であったようで、唄うこと⁽¹⁾で気をまぎらわしていたのであろうか。

ただし麦打ちするときにはかならず唄が唄われていたわけではなく、西小磯東では「ドッコイショドッコイショ」という掛け声だけで唄うことはなかったという。西小磯東では隣近所が集まって麦打ちを行うことはなく、家族を中心として行われていたということであり、すべての地区を当たっ

ていないので断定的なことはいえないが、作業の社会的な共同性が唄の存在と関わっているといえるかもしれない。

では採譜した唄を紹介しよう。

〈1〉 大磯町寺坂の麦打唄

寺坂では二つの麦打唄が採録されている。一つは須藤カメさん(明治25年生、故人)が、一つは杉崎ユキさん(明治18年生、故人)が唄い手となっている。なお、杉崎ユキさんは昭和55年に亡くなっており、渡辺美代さん(明治35年生)がたまたま録音しておいたものを佐川氏がさらにテープ録音した。採譜はそのテープから行ったものである。録音状態はあまりよいとはいえず、歌詞に聞き取れなかった部分がある。

杉崎ユキさんの唄は、天保12年生まれの渡辺慶次郎さんが口ずさんでいたものを覚えたものであるということである。

楽譜(1)での歌詞は、

おまいさんとなれば
あどっこいどっこい
どこまでも
親を捨て
この世は闇となるまで

である。「あどっこいどっこい」は合いの手であろうが、この部分も音程があったので楽譜におとしてある。

この歌詞は恋唄と考えられる。だからといって男と女が実際に恋する気持ちを表すために唄われたものではなく、恋の唄を唄うことにより、作業の場を盛り上げ、作業効率を高めたものということができる。仕事唄としてこのような恋唄が唄われることはよくあることなのである。

さて、旋律を楽理的にみていくと、f(ファ)が核音としてもとめられる。核音とは終始音となるなど、唄の中で固定的に中心的な役割をなす音のことである。ただし核音は一つの旋律の一つだけとはかぎらず、複数の核音がもとめられる場合がある。この唄でもb(シb)がもう一つの核音としてもとめられ、全体が四度音程の核音に支配された旋律となっているといえることができる。

さらに核音の間にある中間音の音程を捉えると、部分的に都節音階がみられるものとなっている。

ざーる三升箆下げて」となっている。「ばばどこへ」の部分がテープからは分からなかった。したがって、テープで聞いた部分を楽譜にしている。

なお、この歌詞は現在のところ、近隣地区では確認できていない。

旋律的にはes(ミb)が全体を通した核音となっているが、as(ラb)もまた核音的であり、やはり4度音程の核音構造をもつ唄であるということが出来る。終始への導音が、esの半音上のeとなっており、部分的に都節音階的な展開がみられるものとなっている。

ところで、西小磯東で臼挽唄の断片が得られた。高橋要蔵さん(明治41年生)が記憶していたものである。

しんぼう金だよ
おおじさんよ
ギーコーギー

というものであった。全体はよく分からないが、「しんぼう金だよ」の部分は、先に楽譜(2)で紹介した寺坂の麦打唄と、歌詞だけでなく旋律的にも同じものであったのである。

このことは麦打唄と臼挽唄とに同じものがみられたという(今回得られたのは部分的な展開であるが)ことであり、唄が作業と対応していないことを示しているということであろうか。

5. おわりに

以上、大磯、平塚で得られた麦打唄・唐臼挽唄を中心に紹介した。先に指摘したように、同じ歌詞をもつ唄の音階構造が異なっており、伝播と受容という視点からこれを捉えた場合、どのようなことが考えられるであろうか。今後は近隣地区の旋律も検討することによって、唄の伝播と受容の様式を詳しく捉えてみたいと思っている。

なお、本報告にあたり、國學院大学文学部教授須藤豊彦先生からいろいろと御教示をいただいた。また、相模原市立博物館の加藤隆志氏、厚木市教育委員会の大野一郎氏から多くの資料を提供していただいている。感謝いたします。今後はこれらをいかして論考をすすめていきたいと思う。

【註】

- (1)大磯町史民俗調査報告書2『国府の民俗(二) 一月京・生沢・寺坂地区一』大磯町、1994年。
- (2)厚木市文化財調査報告書第14集『あつぎの古謡』厚木市教育委員会、1973年。
- (3)『日本民謡大観 関東編』日本放送協会、1944年。
- (4)『山花鳥虫歌』浅野建二校注、岩波文庫、1984年。
- (5)『県央の民謡—仕事唄・行事唄・娯楽唄・子守唄・わらべ唄』神奈川県県央地区行政センター県民部県民課1994年。
- (6)前掲註(3)
- (7)『資料室だより Vol2-No7』大磯町教育委員会、1985年。

(日本民俗学会・日本民俗音楽学会会員)

楽譜(4) カラウスヒキ唄(大磯町寺坂、杉崎ユキ[M18生])

いざーる せんぼざる さげ て のーえ

よめの ざいほへ せんまよ まごをだそーに

- ・拍子がつかめず無拍子で記譜
- ・録音したものを録音したテープから採譜
- ・細かい装束音は記譜せず

二宮町山西の民俗（1）

佐川和裕

はじめに

大磯町郷土資料館では、例年、博物館実習生を受け入れている。これは博物館学芸員資格を取得するために必要な実習で、地域博物館の実情を学び、施設運営や学芸活動についての総括的な実務を学んでもらうことを目的としたものである。しかし、実質12日間の実習期間ではもちろんすべてを経験してもらうことはできないため、実習生からの要望もできるだけ取り入れながらカリキュラムを試行錯誤している。ただ、博物館に職を求めようと真摯に励んでいる実習生も少なくないが、即戦力として実際の現場で求められる技能とは残念ながら大きな開きを感じてしまうのが現状である。つまり、博物館学的な知識はもちろん必要だが、現場で要求されるのは、むしろ道具ひとつひとつの名称や使い方、土器や動植物の同定などの具体的な知識である。それらの知識やその調査技量などが欠けていれば十分とはいえない。

一方、博物館側の学芸専門分野の区分にも問題はある。当館のように考古、歴史、民俗、自然といった如何にも大まかな区分しかしていない博物館では、その範囲において担当を振り分けられていることが多い。場合によっては専攻分野とは全く別の分野を受け持たされることも少なくない。そのためには、何よりもフィールドワークによって経験的な知識や情報を得ていかなければならず、特にさまざまな場面で住民と直接かかわりを持つ現場では、文字通り住民から直接話しを聞く「聞き取り調査」こそ基本的かつ最も重要な作業といえる。しかし、大学の専攻分野に関係なく学芸員資格取得の機会が増えるにしたがって、調査経験を持つような学生が逆に少なくなっているのが現状である。その点は実習生自らも認識しているようで、例年、実習生の側から調査をしたいという要望が出されているため、ひとつの試みとして民俗の聞き取り調査を実施することにした。

ところで、今まで実習の中で聞き取り調査をやらなかったかというところでもない。当館では実習後半に常設展示室の一角を展示替するという実習をカリキュラムに課している。ささやかな面積ではあるが、実習生自らの企画から完成にいたるまでの作業は何よりも実践的で、大学も専攻分野も異なる実習生たちの共同作業は、思いがけない視点を期待できることがあり、実習生からの評判も良い。その際に展示資料の情報を得るため聞き取り調査をおこなったこともある。しかし、共同作業といっても各作業を分担しながら進めるため、調査を全員で経験するだけの時間的猶予はなかった。そこで今回はカリキュラムとして正式に組み

入れることにした。もっとも実習期間中に1日みの調査であるから、実習生にとっての教育的な効果はもちろん調査成果そのものも未知であった。したがって、さまざまなテーマで調査を行なっていくことを念頭におき、次年度以降の館務実習にも継続的に組み入れていこうと考えている。本報告を(1)としたのはそのためである。

また、実習生に対して聞き取り調査や民俗にかかわる予備知識を十分にレクチャーする時間がなかったため、今回は話者からの話を一方的に聞くにとどまった。その上で、適宜質問をしながら各自が興味をもった部分を調査票としてまとめ、あわせて後日レポートを提出してもらった。既に当館で刊行した『Report—大磯町郷土館だより—No15』においてその一部を報告している。なお、今回の報告は実習生からのレポートをもとに、筆者自身の調査票を補ってまとめたものである。

以上、調査を実施するにあたっての経緯を述べてきた。しかし、今まで述べたように館務実習生の教育効果を狙ってはいるものの、あくまでも最大の目的は民俗調査そのものにあることを最後に確認しておきたい。

【註】

- (1)平成8年度は、平成8年7月31日および9月3日～13日におこなった。詳しくは本誌年報(6頁)を参照願いたい。
- (2)今回の調査に参加した実習生は次の8名である。瀬木邦夫(東海大学工学部建築学科4年)・安井千栄子(立正大学文学部史学科4年)・桑島啓子(東京農業大学農学部農学科4年)・松本美樹(帝京大学文学部史学科4年)・宮代将男(駒澤大学文学部歴史学科3年)・大木佐和子(駒澤大学文学部歴史学科3年)・西田貴世美(専修大学文学部人文学科3年)・櫻田優子(トキワ松学園横浜美術短期大学造形美術科3年)

地域の概要

二宮町は相模湾に面した神奈川県ほぼ中央に位置している。調査対象の山西は町の南西部で、JR東海道線と国道1号線(旧東海道)が東西に貫いており、南面に相模湾を望んでいる。今でこそ海岸線から内陸部まで民家が密集しているが、かつては旧東海道筋に商家、農漁家が混在して集約されており、釜野などの内陸部では農業を生業としていた家々が散在していた。なお、昭和40年代初めに海岸線に沿って西湘バイパスが開通したため、景観上は浜と陸が断絶してしまっただが、現在でも地引網を中心とした漁業がおこなわれている。

『新編相模風土記稿』によれば、古くは川勾村と一区であり梅澤の里と呼ばれていたが、寛永年間に川勾村と梅澤村に二分されている。山西村としての初見は寛文の検地帳であるという。また、

小名として元梅澤、釜野、道場、越地があり、特に越地は東海道の立場（梅澤の立場）として茶店が軒を連ね、諸侯の憩息所も整備されていたという。生業に関しての詳しい記述はないが、地引船が5艘、小買附船と称する船が6艘、総計13艘の船があり、主な漁獲は鮪、鰹、比目魚（ヒラメ）、鯖などで、特に当地の名産品として鮫鱈（アンコウ）の名が記されている。また、河岸場があり、米、竹木、炭薪などを江戸へ向けて搬送していたとしている。なお、同書によれば戸数は120戸としているが、『二宮町郷土誌』（二宮町教育委員会 1965）では明治10年時には291戸であったという。

さて、二宮町における民俗に関する報告は残念ながら多くはない。教育委員会による文化財調査や町史編纂事業においていくつかの報告がみられるが、特筆すべきものとしては『二宮町歴史研究会だより—古文書—』（二宮町歴史研究会 1978）において漁業史資料からの論考や漁師の信仰についての聞き取り調査報告がある。なお、神奈川県史にも断片的ではあるが民俗事例が報告されているものの、体系的な報告としては『二宮町文化財調査報告書25号 二宮町民俗調査報告書』（二宮町教育委員会 1997）を待たねばならない。ただし、これも民俗全般を網羅しているわけではない。

【註】

- (1) 例えば、既に前掲した『二宮町郷土誌』のほか、『二宮町近代史話』（二宮町教育委員会 1985）、また、二宮町山西在住の松本昇平氏（明治39年生）による随筆的な著書で、『二宮のむかしばなしふるさとの歌』（伊勢治書店 1989）、『二宮のむかしばなし呼子鳥』（同、1989）、『二宮のむかしばなし生活の歳時記』（同、1990）などがある。また、町史編纂にかかわるものでは『二宮町史資料編2近代現代』（二宮町 1992）、『町史研究にのみやの歴史』第2号（二宮町1990）、『町史研究にのみやの歴史』第3号（二宮町 1991）などにいくつかの報告がみられる。特に『町史研究にのみやの歴史』第2号に掲載されている「二宮町の漁業」は、本稿の話者自身が執筆したもので興味深い。なお、大磯町郷土資料館においても企画展図録として『相模湾の船と船大工』（大磯町郷土資料館 1992）を刊行している。この中で二宮造船所における船大工による造船工程や技術、信仰などを紹介している。
- (2) 『神奈川県史民俗資料調査報告1』（神奈川県 1971）、『神奈川県史 各論編5民俗』（神奈川県1977）
- (3) 同報告書は、町史編纂事業の一環として平成元年から実施された民俗調査が基本となっている。同書の構成は、第1章社会制度・第2章生産生業・第3章衣食住の伝承・第4章年中行事・第5章人生儀礼となっている。なお、町史の本誌（民俗編）は編集されていない。

話者の履歴と環境

話者は二宮町山西に140年続いている漁家の5代目として昭和9年に生まれている。同家の伝承では、旧姓を松原といい、武士であったが断絶し、小田原千度小路で修業を経て140年前に現在地へ移り住んで漁師となったという。古くからフナモチの専業漁家として、家族のほかにフナカタなど常時10人以上の大家族だったという。なお、専業漁家ではあったが畑を所有したり無くしたり、あるいは借りて作ったりと百姓のマネゴトもしてきたという。

話者は昭和15年に二宮尋常高等小学校に入学している。物心がつく以前から祖父の躰は厳しかった。祖父は、ときおり故事来歴を話すこともあったが、その時はかしまって聞かされたという。家業については、「頭で覚えんじゃねえ、体で覚えんだ」「仕事は盗んで覚えろ」と一切教えず、話者が25歳の時に死んだ父親も同様であったという。しかし、祖父に連れられて行き、長じてからは自分で遊びに行き見聞したことに、後年どれほど助けられたか分からないという。中学校卒業後に家業を継ぎ、現在もなお現役として主に地曳網やワカメ栽培漁などをおこなっている。なお、話者の父親は町議や漁業組合長を勤めている。

ところで、話者は同世代の他の話者に比べて、豊富な民俗伝承を持っている。これは、話者がソウリウウッコ（総領っ子）として祖父にかわいがられたことや、早くから身近な伝承に興味を抱いていたことなどがあげられる。自ら民俗資料の保存活動などに力を入れている一方で、話者としても非常に貴重な存在といえる。そこで、同話者からさまざまなテーマのもとで継続的に話を聞くことを前提として今回の調査をおこなった。ただし、冒頭で述べたように、今回は自らの思い出話として自由に語っていただいたので、まず、最も話しやすい子どもの頃の遊びや動植物の名前などが中心となった。なお、話者の年齢にしたがって、昭和12年前後から戦中（太平洋戦争）にかけての内容が主体となっている。

【註】

- (1) 話者の西山敏夫氏（昭和9年2月22日生）にはたいへんお世話になった。また、本稿の記述内容についても、監修していただいた。記してお礼申し上げます。

子どもの様子

家事や畑仕事などの手伝いは日常茶飯事だった。しかし、子どもにとって、手伝いは同時に遊びでもあった。掃除や雑巾がけ、水汲みはもちろん、女子は子守りを頼まれて駄賃をもらったりしていた。男子は薪割りやクズカキ、モシキ拾いなどをした。クズカキやモシキ拾いには、小さい時分に

はメケエゴ（メカゴ）、大きくなるとシヨイカゴを背負って浜の土手や山へ行った。これは年寄や子どもの役目だった。暑い中でイモのツルツケエシや、ノギが汗で付きチクチクと痛い麦刈り、麦運びなどは特に印象が強い。秋の農繁期には子どもの遊びは少なくなるが、その手伝いのなかに遊びを見つけていた。

「コドモハカゼノコ オトナハヒノコ」のたとえがあったように、雨さえ降っていなければ、どんなに寒くても「外で遊べ」と、子どもはすぐに戸外へ追い出された。頭よりもまず身体が第一で、質実剛健の気風が強く、とにかくたくさん食うことが基本だった。そして、兄や姉などがいれば別だが、ふつうは学校にあがる前に自分の名前が読めて、カタカナで名前を書くことさえできれば上等だった。また、北や南の方位を覚えたのも学校にあがってからで、オウライ（東海道、現国道1号線）をもとにウミッカワ（海側）とヤマッカワ（山側）、ニシとヒガシだけで実際の方位とは少々ずれて認識していた。

学校にあがってから最初に教わったのは、「ヨクマナビ ヨクアソベ」ということだった。しかし、先生に「ヨクアソベ」と言われなくても、年上の者から教わりながら自分たちも考えてよく遊んだ。特に上下のつながりが強かった。だいたい高等科の2年が大将となり、年上の者が下の者の面倒をみた。1年でも先に生まれたことはそれだけで目上であって、リコウやバカに関係なく「大きいものに従う」という漠然とした統率がなされていた。それらはやがて青年団の組織のなかにも生かされ、さらに青年の力の強かった当時の社会では地域のナワバリ意識のようなものにもつがっていたようだという。

遊ぶ時間にも特徴があった。話者の地域（茶屋町）では、1班・2班とそれぞれ男女別に班を構成して登校したが、その待ち合わせの時間が遊ぶ時間でもあった。みんなが集まるので、このときに大がかりな遊びをすることが多かった。熱中しすぎて始業時間に遅れ叱られることもあった。昼休みはもちろんだが、下校時も大切な遊びの時間だった。特に家が遠ければ遠いほどいろいろな遊びをやりながら帰った。

話者は昭和15年に尋常高等小学校に入学しており、その春に紀元二千六百年の祝典があった。その陰で戦争準備のため極端に物資が無くなり、生活が大きく変わったという。それ以降、終戦まで生活物資はシリツボミに少なくなっていた。学校への通学スタイルは、豚革のランドセルに半ズボンの黒い学童服、ズック、アサブラを入れたゾウリブクロを手にはぶら下げて行った。話者は、物心がついたときには洋服を着ていた。学校が休みの日には、まだ着物を着ることはあったが、学校

へ着物を着て来る子は1人もいなかった。先生方も男性は着物はいなかったが、袴姿の女の先生は何人もいた。

戦時中から戦後にかけては、昼は家へ食べに帰る子どもが多かった。なかには家に帰っても、飯を食べてこないこともある。運動場をプラプラしている場合もあるし、ちょっと知恵がまわれれば家の方へ行って食べたようなふりをして戻ってきた。弁当を持って行くこともあったが、その内容はアルマイトの弁当箱の真ん中に梅干しを入れただけの日の丸弁当か、カツプシに醤油をかけたものか海苔を並べたもので、それが飯の間に入っていて2段になっていたらたいへんなものだった。だから、魚の煮つけや塩焼きがオカズに入っていればワーと歓声があがるほどだった。昭和30年代になって「巨人、大鵬、卵焼き」ともてはやされたことがあったが、それ以前に弁当に卵焼きを持ってくるのは、オベッソウのオボッチャンかオデジンの子どもだけだった。

また、当時の子どもはよくハナを出していた。なぜかいちばんハナを出していたのは、小学3、4年生ぐらいの男子だったという。いちばんすごいハナをゴトツパナと呼んでいた。袖口で拭いていたので、布がテカテカに光っていた。ハナをかむのには、新聞紙や雑誌の紙を使うことが多かったが、チリガミ（ハナガミ）があれば、1回で捨てることなく何度も使った。

川の遊び

春のお彼岸を過ぎる頃になると男子は川で遊ぶようになる。川ではいろいろな遊びを見つけては楽しんだ。例えば川に流れてきたものを見つけると先を争って石を投げて当てたり、河口に近いところでは川の蛇行によってできている崖の縁を歩いて片足で崩し、その崩れ方の大きさを競ったりした。落ちてズブ濡れになると、ドンブラゲとはやされた。

4月も半ばを過ぎれば水もだいぶぬるむので、川へ魚をすくいに行ったりした。西方町境を流れる押切川（中村川）にはフナ、エビ、ガーバ、ハヤ、ウグイ、ウナギ、カニ、カメなどがいた。ガーバというのはハゼの仲間であるガーバッチョとも呼んだ。たいていタマ（タモ）やオヤザル、ミで水中の大きい石をどかしたり、土手が崩れて木や竹の根が水中にあるその中を棒でつつ突いて追込みすくってとった。川の流れを塞ぎ止めて中の水を掻き出してとる方法もあった。これをケーボリ（カイボリ）と呼んでいた。また、4月ともなれば、アイ（アユ）がのぼった。タマを河口近くの流れの狭いところにパッとかぶせればとれた。このあたりの川は規模が小さいので専業や副業として魚をとることはなく、あくまで子どもの遊びであっ

た。なお、とった川魚を食べたことはない。海の近くだったので食べるのは海の魚だった。

海の遊び

春のお彼岸を過ぎると海へも行くようになる。しかし、まだこの時期は川で遊ぶことの方が多く、特に小さな子どもだけの時は、やはり川で遊んだ。海で遊ぶのは主に夏の水浴びで、下の者から上の者まで多人数で行った。ただし、水浴びをするのは、ほとんどが男子だった。いで立ちはパンツかロクシャク（六尺）で、ジューパン、ハンテン、シャツなどを羽織って行った。上半身が裸だとオマワリサンに咎められてしまったという。水浴びをするときは、小さい子は全部脱いだ。

まず、浜道の脇にあった畑のトマト、マクワウリ、キュウリを盗って行き、波の向こう側へホッポリ込んでおいた。次いで、1年、2年の背の低い者から順に、波がウツてくる（砕ける）ところへ向かって頭から飛び込んでいった。まだ泳げない子は多くいたが、アブカ（溺れる）すると上の者がかまえて助けた。アブカして死んでしまった例はなく、これによって泳ぎを覚えたのだという。寒くなると砂浜で腹ばいになって暖まった。この時に、先ほど海に入れておいたトマトやマクワウリを食べた。喉が乾いているのでうまかったが、キュウリだけは塩がないとだめだった。なお、地先の浜で遊ぶ範囲は決まっておき、特別なことがない限り他の地区の浜までは行かなかった。また、お盆のときは海の中からオショロサンが引っ張り込むので泳いではいけないと言われて泳がなかった。

ところで、かつてはカンダチ（夕立）が多かった。カンダチがくると、上着を脱いでまるめて抱えて駆けて帰ったり、軒先へ飛び込んで雨宿りをしたりした。雷が鳴れば「クワバラ クワバラ」と唱えたり、蚊帳を吊ってその中へ入ったりした。また、子どものヘソを取りにくるというので、昼寝のときもハラマキやサラシ、ハラガケ（キンタロサン）をしてヘソをださないように気に掛けた。近年カンダチはほとんどなくなった。

動植物の呼び名と遊び

〈トンボ〉 いちばん大きなトンボをフジと言った。今で言うオニヤンマで、いつも1匹だけで飛んでいた。フジの次に大きなトンボをカンノと言った。今で言うギンヤンマと思われるが、特に雄と雌がつながって飛んでくるのをカンツルミと言った。カンツルミというのは「カンノがツルんでいる」という意味で、つながり方によってはホカケと呼んだ。2匹を捕ることができればたいへんなものだった。また、黄色っぽいものを、その色からアワといい、水色と黒のやつをコメと言っ

た。コメは今で言うシオカラのことだが、シオカラと呼ぶようになったのは戦時中以降のことだという。お盆近くになって出てくるのがオショロで、オショロの中でも真っ赤なやつが混ざっているものをベニと言った。オショロは今で言うアカトンボのことで、山から下りてきて山へ帰ると言われていた。また、トンボの中でも最も小さなやつをカトンボと言った。

トンボはたくさんおり、最も身近で、且つセミなどと比べるとずっととりやすかった。したがって、普段も「トンボとセミ」と言い、「セミとトンボ」とは言わないのだという。小さなトンボをたくさんとっても自慢にならず、大きなものをとることに励んだ。オウライや、オウライから行く浜道には畑の上にトンボがたくさん飛んでいたの自然と子どもたちも集まった。

トンボは、もっぱらサデ（捕虫網）でとったが、特に釣ってとることをトンボツリと言った。テグスはまだ手に入らなかったの、細い竹竿（オンナダケ＝シノダケ）に木綿糸を結んで釣り針をつけた。エサは家の蠅をとり、釣り針に引っ掛けて飛ばしておいた。浜の蠅はコバエなので使わなかった。トンボは人影を見ると次第に高く上がってしまうので、しゃがめばトンボも下りてくるだろうと思い、しゃがんで待ち伏せていきなり飛び上がってとろうとするが、なかなかとれなかった。その中をフジやカンノがすいすい飛んでいた。なお、オショウロはオウライにはあっちからこっちまでいっぱい飛んでいるが、高くてなかなかとれない。トンボは南北に飛ばずにオウライに沿って東西に飛ぶという。また、夕方、薄暗くなるときの最も多く飛んでいる。遅くまでトンボをとっていると、「バカスケ、いつまでトンボとってんだ。トンボを佃煮にして食うつもりか」と、よく叱られた。

〈センミ〉 今で言うセミのこと。センミには多くの種類があり、その鳴き声から呼び分けており、鳴き声そのまま名前になっていた。ミンミンというのは今のミンミンゼミ、シャーシャーというのは今のクマゼミ、カナカナというのはヒグラシにあたる。いちばん多いのはジージーで今のアブラゼミ。また、ツクツクボーシが鳴き始めたら秋が近づいてきた証拠だった。特にツクツクボーシは、鳴き声が「…カーイーヨー、カーイーヨー」と鳴いてきたら鳴き止む直前となるので、もうとれない。アブラゼミ、ヒグラシなどの名を言うようになるのは、学校に通うようになってからで、理科などで知った。

〈ブンブン〉 現在ではコガネムシなどと呼ぶことが多い。かつてはいくつかの種類に分けて呼んでいた。まず、金色に光っているやつがカナブン、茶褐色のやつはオバアと呼んでいた。これ

はケヤキの木を揺ると落ちてきた。また、つかまえると手が汚れてしまうようなものをクソブンブンといい、畑の大豆にうじゃうじゃいたという。

〈ゴロウ・ジュウロウ〉 今で言うカブトムシのことだが、カブトムシと呼んだことはなかった。一概にゴロウ、ジュウロウと呼んでおり、特に雄をゴロウ（五郎）、雌をジュウロウ（十郎）と呼んだ。これは曾我物語の曾我五郎時致と十郎祐成兄弟の仇討ち伝説にちなんだもので五郎は力持ちであるという伝承から雄をゴロウと呼んだのだろうという。

〈サムライ〉 木の根元の地中にフクロをつくっている蜘蛛のこと。特にマサキと竹の垣根の根元に多かった。フクロを引っぱるとスーと抜けるので、それらを集めてきて蜘蛛を出し、フクロをぐるっと丸にして土俵とした。そのなかで2匹のサムライを勝負させる。負けると腹を切って死ぬので、サムライの呼び名があるのだという。勝っても傷だらけになると、「切腹させんべえ」ということになり、サムライをつまんで折り曲げてやると自分で自分の腹を切った。

〈ホタル〉 かつては珍しくなかった。ホタルをとるには田のあるようなところへ行き、捕まえると蚊帳の中へ放した。灯火管制以降の特に昭和16～18年頃は、夜はいつそう暗くなったのでホタルが目立った。夜、夕涼みにオウライへ出るとホタルが飛んでいたの、よくウチワで追った。

〈チョウチョウ〉 モンシロ、カマクラチョウチョウなどの名を覚えている。カマクラチョウチョウは黒くていちばん大きなチョウチョウだった。飛んでいけば追いかけたが、なかなかとれず、棒でたたいて落としたりした。

〈バッタ、ガチャガチャ、スイッチョ〉 バッタにはクソバッタ、オンメなどと呼ぶものがあった。両足を揃えて持ち、「オンメハタオレ、ハタオレ」とはやして遊んだ。竹や草の茂みのところをボサッカ、またはボサッカブラと言ひ、そのような場所にはガチャガチャ、スイッチョなどがいた。ガチャガチャは今で言うクツワムシ、スイッチョはキリギリスのことで、やはり鳴き声からの名前。これらを竹カゴに入れて飼い、キュウリやナスを与えて鳴き声を楽しんだ。

〈クビキリ〉 キリギリスをスマートにしたようで、羽を押さえてどこでもいいから噛み付かせ、引っ張ると首がとれてしまうことからの呼び名。思い返してみれば、とても残酷な遊びだったという。

〈チョッチョツ〉 春になると「チョッチョツとりに行くべえ」と言った。チョッチョツというのはホーホケキョと鳴く前のウグイスのこと。

〈ヤマンバト〉 ヤマンバトは「ドテッポー、ドテッポー」という太い声で鳴くのですぐ分かった。

〈メジロ〉 メジロも多かった。秋が深まる11月末になると川勾神社付近や吾妻山の頂へメジロとりに行った。霜が下りてからとったメジロはシモクイといい、死にやすい。メジロを売るには雄の方が高く、雌は半値になってしまった。

〈スズメ〉 スズメは冬にいちばん目についた。木の股とゴムでパチンコを作り、道路の小砂利で当ててとった。

〈ニワトリ〉 ニワトリは農家以外の家では飼っていないので卵は貴重だった。お見舞いへ行くのに、卵10個持って行けば、それだけで十分だった。持って行くときは、お菓子の箱（ボール紙）にモミガラを入れ、その中へ並べて持って行った。

〈カガミッチョ〉 カガミッチョというのは、トカゲの子どもみたいな小さなもののこと。指でさすと、指の先から腐ってしまうと言うので、親指を中に入れてこぶしで指さした。

〈ヘビ〉 ヘビも多かった。アオダイショウはニワトリの卵を狙いにくる。草葎きの家には、ネズミを狙うヘビが住んでいた。ツバメなどの卵をそのまま飲込むと、高いところから自分で落ちた。シマヘビやジモグリはどこでもいた。また、山へ行けばヤマッカガシを見ることができた。ヘビがたくさんいたのは、米や大豆などの穀物を求めてネズミがたくさんいたからだという。戦後、瀬戸物の卵をニワトリ小屋の中に置いておき、それをヘビが飲んで死んでしまったということがあった。ただし、海寄りの子どもたちは、あまりヘビの種類について詳しくはなかった。

〈イヌ〉 イヌを飼っていた家は珍しかったがノライヌは多かった。ノライヌを捕りにくる人がおり、イヌッコロシと呼んでいた。

〈ネコ〉 ノラネコも多かった。ノラネコにとられないように、魚を入れるオケには蓋があり、これをヨウバチと呼んでいた。

〈その他〉 このほかにムカデやイモリもいた。ただしイモリは年寄はいたというが、自分は見ることがない。植物ではウズランメ（ユスラウメ）やグミ、ナツメ、スイカンボ（イタドリ）、ニッキなどが食用になった。グミは渋かった。ナツメは台風が通過すると落ちるので拾って食べた。木になっているうちはまずく、黄色くなったものもいい。スイカンボはなるべく根元の太いクキの部分を食べた。塩を付けなければ食べられなかったの、紙に塩を包んで持っていった。ニッキは祭りなどで買った。生のままではだめなので、根を掘ると干してからしゃぶった。また、ヘビイチゴはヘビが食うとって食べたことはない。なお、アオウメは、食べたなら死ぬと言われ、その時季になると親や先生から厳重に注意された。アオウメを食べて実際に死んだ子もいたという。

さまざまな遊び

〈カクレカンジョウ〉 秋になるとよくやった。やっていると夢中になってしまう。秋の日暮れはツルベオトシで「すぐ暗くなっちゃうからよせ」と、よく言われた。天狗さんにさらわれちゃうとも言った。「やれ、どこの村のだれそれは天狗に……」という言い方をした。その後「人さらいにさらわれてサーカスに売られちゃう」と言うようになった。「神隠し」という言い方はしなかった。

〈コマ〉 暮れから正月にかけてはコマ回しが盛んになった。コマの回し方には男回しと女回しがあった。斜め上や横から投げるのが男回しで、手前から向こうへほうり投げるのが女回しだった。勝負の仕方は、まず女回しで一斉に回した。回らないコマはビリッコマといった。いちばん寿命の長い（長く回っている）ものがテンカとなる。その前がテンカシタとなり、いちばん寿命が短かった者がビリとなる。次にビリがいちばん最初に回し、次はビリのコマにおつけるように回していく。コマは鉄コマだったので、ぶつけたときカネワにあたるのをカネワ、その下にあたるのをゴック、上に当たるのをノートーと言った。ゴックはうまく当たると相手はふっ飛んで消されてしまう。カネワの場合は、下の者が2つのコマを紐で囲い、両手でガチンと当てると上になれた。「ノートッコマは消しなせ」といい、やられた方のコマは問答無用で消した。なお、テンカのコマがテンカシタのコマよりも早く終わってしまえばテンカは入れ替わった。また、テンカでもコマが回らなければビリッコマなのでビリとなった。寿命を延ばすために、コマを回す麻紐ではたとえフサが切れてどンドン少なくなるので、ゲタやゾウリではたいた。

〈カルタ、スゴロク〉 とともに正月に遊ぶことが多かった。カルタはイロハカルタで、戦中は兵隊ものが多かった。

〈竹馬〉 正月にやることが多い。足をのせるところは竹の節を利用し、割ったマキ2本で竹を挟んで前後を針金で縛った。足が地についているような低い竹馬はゾウリと言った。節で数えて1段・2段といい、高いのに乗って得意になった。また、片方を肩に担いで片足で飛ぶのをテッポウと言い、「テッポカツイダ ハイタイサン……」と歌いながらやったが、いちばんむずかしかった。

〈氷〉 冬の朝は氷がオモチャだった。氷をとってきて割ったり投げたりした。赤くなって痛い指先をかがめ、一生懸命に息を吹きかけて暖めたが、シモヤケやアカギレがよくできた。

〈ウマノリ〉 男子が冬場にいちばんやった遊び。オウライを横切ってやった。2組に分かれ、電柱を利用して小さい者が立ち次々に前の者の股に首を突っ込んで馬になる。乗り手は反対側の家の前から助走して飛ぶ。馬が10数えるうちにつぶれた

り、全員が乗り終わらないうちにつぶれたら、もう1回馬をやらなければならなかった。そこで、いろいろな作戦をたてながらやった。このウマノリは、朝、学校へ行くために全員が集まるので、その時にやるが多かった。

〈オシクラマンジュウ〉 これも冬の遊び。地べたに輪を書き、その中に外を向きながら尻と背中を押す。そこからみ出すと負けになった。「オシクラマンジュウ、オサレテナクナ」と繰り返して言いながら押した。寒中でも小汗をかいた。

〈テンツキ運動〉 シャがんだ姿勢から、天を突くように大きく伸び上がるしぐさを繰り返す。戦争が激しくなるにつれ、寒いというと学校で先生がよくやらせた。

〈石ケッチン〉 今で言う石ケリのこと。主に冬にやった。

〈ブツケ〉 メンコのこと。絵柄は、戦前には八幡太郎義家や楠正成が多く、大きなものほど偉い武将が描かれていた。戦時中は軍人の絵柄が多くなった。なお、いずれも丸型が主流だった。買ってくると、菓子折りなどのボール紙を裏へ何枚も重ねた。こうすると重たいので負けなかった。

〈カッチン玉〉 ビー玉のこと。なお、石ケッチンでは石を取られることはないが、ブツケとカッチン玉は真剣勝負なので負けたら取られた。

〈兵隊ごっこ戦争ごっこ〉 兵隊ごっこというのは幼年の子どもたちがやるもので、チャンバラだった。年齢が上になると戦争ごっこになった。戦争ごっこは、4月3日のオセックに遊ぶもので、二手に分かれて山と浜の土手に陣取り、合戦をした。学年によって階級がつき、少尉になると8番線の針金でサーベルを作り、畑へ数え切れぬほど突き刺して光らせておいた。太い青竹に水とカーバイトを入れ、マッチで根元の小さな穴に火をつけて大砲と称した。

〈勲章ごっこ〉 王冠はめつたになかったが、ビールやサイダーの王冠が手に入ると胸につけて遊んだ。

〈タンク〉 昭和9年に拡幅と新道が完成し、真ん中だけコンクリートで舗装されたオウライを演習の行き帰りのタンク（戦車）が時折通った。ガラガラという勇ましい音が風に乗って遠くから聞こえてくるので、外へ飛び出して手を振った。敬礼をすると天蓋をあけて顔を出している兵隊さんが敬礼をしてくれた。

〈アタマサワリ〉 クビに手を当てられたら負け。二手に分かれて頭を触られたら死に、最後にどちらが生き残るかで勝ち負けが決まった。明治39年生まれのお父はクビキリという名で呼んでいたが、大正末期頃からクビからアタマになったといい、どちらもふつう左手で防ぎ、右手で攻め、1人生き残った方が勝ちとなり、何回もやった。

〈デンシンオニ〉 主に学校の帰りに同級生で遊

んだ。道路を横断しながら電柱から電柱へと渡っていく。電柱に触ってればオニにつかまらないが、離れたときに体を触られるとオニになる。

〈ナワトビ〉 藁の縄を使って大勢でやった。オオナミコナミとか、回し手が「オジョウサン、オハインナサイ」と歌うとすかさず「ハーイ」といながら入ったり、電信柱に触って戻ってくるなどのルールがあった。どちらかと言うと女子の遊びだが、女子のやっているところへ男子がいたずら心で飛びに入ったりすることもあった。ただし、「電信柱に触って戻ってくる」のは主に男子で、自動車がたまにしか通らないオウライで盛んにやった。いずれも、つかえると交代して縄の回し手となった。

〈ゴムトビ〉 女子の遊びだが、小さい頃には男子も混ざってやった。一段、二段と上げていき、失敗すると交代となった。

〈オママゴト〉 寒いときは、じっとしている遊びはやらない。春になって暖かくなり草花が芽を出すと、タンポポなどの野草や、秋口には野菊などの花をとってきて遊んだ。地ベタに線を引いてそこに座ったり、大人の目をごまかしてゴザを持ち出して座った。女子の遊びだが、小さい頃はお父さん役などで男子も入った。学校へ上がると「オトコとオンナがマンメンチ」とはやされ、男子は軽蔑された。

〈オテダマ〉 女子の遊び。「オヒトツ、オヒトツ、オヒトツのオサーライ」と歌いながらおこなう。手遊びとしてはアヤトリも盛んだった。

〈セッセッセ〉 女子の手遊び。歌は「夏も近づく八十八夜……」、ヒロセ中佐の「トドロクツツオト……」が主だった。

〈マリツキ〉 マリツキの歌のうち「あんたがたどこさ……」は戦後に盛んになった。それ以前は「イチレッダンパンハレツシテ ニチロセンソウ……」と歌っていた。

〈その他〉 オウライで、「モロコシモロコシアノコガホシイ コノコガホシイ」と二手に分かれて歌いながら、前に出たり退ったりして遊んだ。また、「カゴメカゴメ」、「トオリヤンセ トオリヤンセ」などや「ぬり絵」、「着せ替え」などのほかに、行事やお祭りに行くことも楽しみのひとつだった。話者は、昔の子どもは遊びの天才であったといい、さまざまな物を使って野山や原っぱを駆け回り、手足が傷だらけになると、衣服が破けても、さらに川や海でドンブラゲ（ずぶ濡れ）になっても懲りずによく遊んだという。

まとめにかえて

今回の調査で気づいた点をいくつかまとめておきたい。まず1点めは、遊びに季節感が感じられることであろう。本報告では遊びの種類を把握し

やすくするために季節ごとに区分する方法はとらなかったが、遊びの記憶が季節の情景とともに思い出される傾向があった。ただし、現在の子どもの遊びに季節感がないという訳ではなくもちろん一部では当時と変わらぬ遊びが生き続けていることもあるに違いない。もっとも、現在の子どもの遊びを精査している訳ではないため、単にノスタルジックに述べることは避けたいと思うが、大局的にみれば確実に季節感が薄れつつあることも事実だろう。まして、話者のように正月や盆、彼岸、四大節、あるいは地域の祭礼などの行事と絡み合わせて語られるような遊びの要素とはかなり違ってきていることがうかがえる。ここでは、ひとりひとりのもつ遊びのレパートリー、あるいは集団での遊びの内容やそれにかかわる規律などを比較する材料は持ち合わせてはいないが、それらは質的に大きく変わってきているであろうことが想像される。

2点めは、動植物の俚称をしっかりと把握する必要性を感じたことである。ある意味では当然の課題ではあるが、俚称と現在の一般的呼称（あるいは標準名）とを照会しながらの調査は意外と手間のかかる作業である。近年、拙館や近在の博物館などで「セミの脱け殻調査」がおこなわれている。これは、脱け殻の種類や個体数を調べることにより、環境指標とも成り得るセミの生息分布を把握しようとしたものである。このうち、南方系の種であるクマゼミについての発生状況を知るため、調査員は脱け殻の採集に加えて、過去の情報を得るために年配者に聞き取りをおこなうこともあったようである。ところが、調査を受けた話者がクマゼミの名称を知らなかったため、調査員の質問内容に対応できなかったという話がある。このように、話者と調査員との世代差のため名称を共有できないことによる弊害例も出ている。もちろん、これは民俗調査の際にも大いに参考になる教訓といえよう。

さて、3点めは話者自身が「昭和15年」という年代をひとつのターニングポイントとして認識していることである。確かに昭和20年の戦争終結を機に、体制的に大きな転機を迎えたことは事実であるが、日常の暮らしぶりにおいては、物資の統制を受けて配給制が敷かれるようになった時期こそ大きな転機であったとのことである。そして、話者が尋常高等小学校に入学した記憶と相俟って昭和15年が印象的に語られている。今後、同話者からさまざまなテーマにおいて継続して聞き取りをおこなっていく中で、昭和15年という時期を十分留意しながら調査していきたいと考えている。

(当館学芸員)

年 報

— 平成 8 年 度 —

◇平成 9 年 12 月 20 日 発行

◇編集発行

大磯町郷土資料館

神奈川県中郡大磯町西小磯446-1

T E L 0463-61-4700

◇印刷

(株) カメイ写真